

経営学は実践にどのように役立つか（2）

経営学の科学性

前回、経営学の学問水準や科学性が他の学問領域より低いと述べました。そして、その大きな原因の1つは、経営現象が非常に複雑で、科学的発想の基盤となる因果関係の定式化・明確化が困難なためだ、という点について説明しました。今回はこの続編です。

学問領域とテキストブック

経営学におけるこうした科学性の低さは、学問としての体系のなさ（ないし体系志向性の低さ）にも現れています。経営学のテキストブック（教科書）を、ちまたの書店に行ってご覧になった方はわかると思いますが、まさに多種多様、千差万別です。

他の学問領域、たとえば自然科学（物理学、化学、工学など）や、社会科学でも経済学や法律学では標準テキストは大概1つです。たとえ複数のテキストブックがあったとしても、目次を見ると扱われている領域やその構成はほぼ同一です。

経営学のテキストブック

ところが、経営学ではテキストブック類は非常に多く、どれが決定版といえるような状況にはありません。テキストブックに書かれている内容も、論者が異なれば書いている内容もまちまちです。まさに10人経営学者がいれば10個の学説が存在する、と揶揄されるゆえんです。

問題は、どうしてこういう状況なのかということ、そして学問としての体系がない経営学は本当に実務に役立つのだろうか、ということです。少し回り道をするようですが、この問いを他の学問領域と比較しながら考えてみることにしましょう。

物理学での完璧な因果関係

自然科学では、因果関係はきわめて明確で、真理は1つしかありません。例えば、物理学で出てくるニュートンの「万有引力の法則」はあまりにも有名ですが、この法則は、数式できっちり定式化が可能です。空中で手に持っている物体を手放すと、その物体は、他の条件が同一であれば必ず同じスピードと衝撃で、地上へと落下します。つまり、方程式 $y=f(x)$ の式に x を当てはめて計算すれば、必ず同一の y が出てくるわけです。この因果関係は鉄壁で、解は1つしかあり得ません。

人間が要素に入るか否か

このように自然科学の世界では、要素間の関係は鉄壁の因果関係で提示されるのですが、人文科学（文学、芸術学、歴史学など）や社会科学（法律学、経済学、政治学など）では

そう簡単にはいきません。この端的な理由は、自然科学の世界では原則、構成要素の中に「人間」が出てこない、あるいは敢えて「人間」が出てこないよう捨象してモデル化しようとしているからです。要するに、説明の難しい「人間」という要素が入り込むと、途端にモデル化が難しくなるのです。

歴史学での曖昧な因果関係

例えば人文科学を考えてみましょう。そもそも人文科学は、人間の個々人の活動を体系化しようとした学問領域で、英語では人間を表す **human** と似た **humanities** という単語で呼ばれます。人文科学は、人間個々人の活動についての学問なので、そもそも定式化や因果関係には馴染みません。

例えば、歴史学において、「戦争はどういった条件があるときに発生するか」という問いに、正確に答えることは極めて困難です。外交上の紛争が起こったときにも戦争は起こるでしょうし、飢饉やちょっとした揉め事が戦争に発展したこともあります。つまり「AならばB」の形できっちり定式化することができないのが人文科学の特徴です。換言すれば、予測不可能性が高い（即ち科学性は低い）のが人文科学です。文学や芸術学などが典型例です。

科学性は低くても意義はある

誤解がないように慌てて付言しますが、科学性が低いこと＝学ぶ価値がないこと、ではありません。むしろ、人間社会にとって非常に重要な意義を人文科学は持っています。あくまで、科学の要件を因果律の確実性に求める立場からするとこう言える、ということに過ぎません。科学だけでは世の中の全ての現象を説明できない、ということです。

では、社会科学での因果律はどうでしょうか。次回、説明することにしましょう。

株式会社インソース <http://www.insource.co.jp/>

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 1-19-1 神田橋パークビル 5 階

TEL : 03-5259-0070 FAX : 03-5259-0075